

教職支援センター ニュースレター

巻頭言



【「障害のある生徒などへの指導」(新学習指導要領から)】

平成29年3月に公示された中学校学習指導要領では、第1章総則第4項の2の「特別な配慮を必要とする生徒への指導」に「障害のある生徒などへの指導」が新設され、特別支援学校等の助言や援助を活用しながら個々の障害の状況等に応じた指導内容や指導方法の工夫を、組織的かつ計画的に行うということがまず示されています。

わが国の特別支援教育制度では、障害のある生徒が教育を受ける場合は、柔軟に整備されてきています。例えば、比較的障害の重い場合は特別支援学級に籍を置くことが多いのですが、障害の程度が軽度になるにつれて、小中学校の特別支援学級に在籍しそこで主な学習を進めることや、主として通常の学級に在籍しながら定期的に通級による指導を受けること、あるいは通常の学級の中で必要な配慮を受けながら学習を進めることができるような仕組みにもなっています。副次的な学籍として地域の学校に在籍しつつ特別支援学校にも籍を置くということも可能になってきています。ところが、障害のある子供の教育課程の編成については、これまでの学習指導要領上ではやや曖昧になっており、障害の程度やその子供の発達の実態に応じた指導が展開されていたかどうかは、非常に危うい面もありました。

特別支援学校の教育課程には「自立活動」という領域があります。これは、障害を改善・克服するための教育課程領域の一つとして昭和46年の学習指導要領に位置づけられた「養護・訓練」が平成11年の学習指導要領で「自立活動」として再定義されたものです。「自立活動」は、個々の障害の程度や発達の実態を細かく評価し、一人一人の自立を目指した主体的な取り組みを促す活動が計画されます。そのため、すべての子供について個別の指導計画が作られます。特別支援学校はすべて、全員の個別の指導計画を作成しています。

今回の新学習指導要領では、障害による様々な困難を克服し自立を図るために、特別支援学級での教育課程には自立活動を取り入れること、また通級による指導が行われる場合の特別な教育課程の編成においても特別支援学校の自立活動領域を参考にすることが求められています。さらに家庭、地域および医療や福祉等の関連機関と連携を図り、長期的な視点で教育的支援を展開するために個別の教育支援計画を作成し活用することに努め、とくに特別支援学級の子供や通級による指導の対象となる子供には個別の教育支援計画や個別の指導計画を作成し、効果的に活用することが明記されています。

今年度からは、高等学校における通級による指導が導入されています。この実践も急速に広まることと期待しています。教育の世界が率先して障害を理由とした差別や排除をなくすことに取り組むことは、社会の制度を整え、また人々の意識を変えていくことにつながると思います。



庄司和史(教職教育部門長)

シリーズ 活躍する卒業生

教職支援センターの前身の教職教育部が発足して10年が経ち、多くの卒業生が教育現場で活躍しています。毎回テーマを決めて、卒業生の活躍を紹介します。

～ vol.6 理学部数学科編 ～



長野県岡谷東高等学校 数学科 教諭

鉄矢 幸菜 先生

理学部数学科 平成28年度卒業



無事に大学を卒業できたわたしが、長野県の高校で働き始めて一年と半年が経ちました。現在、一年生の担任です。一年半仕事をして感じるのは、教員という仕事は「いい」仕事だ、ということです。

わたしが「いい」と思う一番の理由は、やはり人の成長を目の当たりにできることです。成長といっても、提出物が期限にちゃんと提出できたとか、ある問題が解けるようになったなど、些細なことばかりです。でもその些細なことを積み重ねて、日に日に大人に近づいていく子どもたちの様子を見守れるのは、教員の特権です。わたしは生徒たちと一緒に笑ったり、感動したりすることがとても楽しいと思っていますが、教員は、その笑ったり、感動したりすること自体を仕事にできます。これも教員の特権だと思います。

もちろん人間を相手にしているので、苦しいことや、悲しいこと、腹立たしいこと、どうにもならないことが沢山あります。分掌業務も山盛りなので、なかなか定時で帰れません。今年度になって休日出勤も普通のことになってしまいました。しかし、いま向き合っているクラスの生徒たちが、今の苦しさ以上の笑顔と感動をわたしに与え、大きく成長して卒業してってくれるという期待があるので、仕事を投げ出そうとは全く思いません。クラス生徒と一緒にわたしも成長していく、ということを常に心がけています。ありがたいことに、初担任をしているわたしの周りには、相談にのってくださる先生方が沢山いらっしゃいます。そういった周囲の環境も、教員でいられる要因だと思います。

学生時代、わたしは自分なりに勉強を頑張ってきたつもりでしたが、「大学時代にしかできない色々なことに挑戦して、もっと勉強しておくべきだった」と感じています。これを読んで、「教員っていいな」と思った方は、ぜひ勇気を出して教員になってほしいです。ぜひ学生期間にできるだけ多くの人と話し、多くの場所へ行き、多くのことを学び、高い志を持って教員になってください。

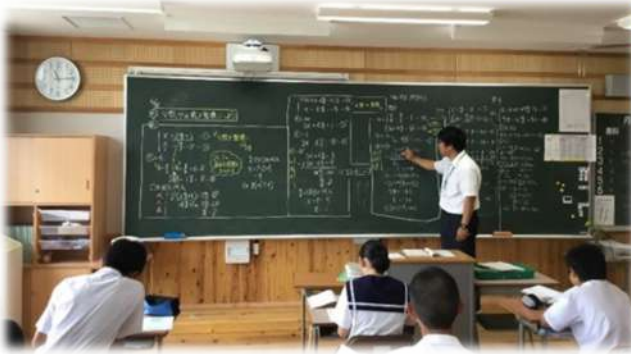




山口県防府市立桑山中学校 数学科

木村 公亮 先生

理学部数学科 平成24年度卒業



教員として正規採用されてから、半年が過ぎました。新しい生活はとても忙しいですが、毎日が新たな発見の連続で、充実した日々を送っています。4月のスタートから、早くも立ち止まることになりましたが、先輩の先生方や同僚に助けをもらいながら、頑張りました。多くの方に支えられ、とても心強く感じています。

今年は、2年生の担任をしながら、数学を教えています。その中で、自分が頑張っていることを紹介しようと思います。

学習指導では、特に板書を丁寧に書くように努力しています。見やすく、分かりやすい板書になるように工夫し、重要な部分や大切な言葉については、色チョークを使うとともに授業を通して生徒に意識させたいポイントは黒板に残すようにしています。例題は、枠で囲み、どこに例題があるのかをはっきりさせています。字の間隔を考えて、バランスをとり、1時間の授業が終わったときに、何を学習したのかがわかるような板書を心掛けています。

また、グループ学習やペア学習を取り入れた授業作りに挑戦しています。常に一人で解決できない課題があれば、先生や友だちに聞くようにと、授業の中で生徒たちに指導をしています。それは、生徒たちがお互いに相談し合うことで、難しい課題にも挑戦できると考えたからです。最初は話し合いがスムーズに進みませんでしたでしたが、何度も繰り返すことにより積極的に話し合う生徒が増えてきました。

これからは、ICTを活用した授業を行っていきたいと思っています。プロジェクターやタブレットなどの情報機器を活用し、イメージしやすい教材を提案することで、生徒たちが楽しいと思える授業になるよう日々努力していこうと思っています。

学級担任としては、学級の中でどの子も過ごしやすい環境作りに励んでいます。困っている友だちがいれば、みんなで助け合い、解決できるようなクラスを目指して日々指導しています。同時に、何事にも積極的にチャレンジするように、指導しています。

部活動では、サッカー部の顧問をやっています。サッカーの技術指導だけでなく、道具を大切にすることや礼儀やマナーを中心に日常生活で大切なことも一緒に指導しています。当たり前前にサッカーができるということに感謝し、部活動に励むように、生徒たちには伝えています。

これから教員生活を送る中で、授業や学級経営に力を入れ、日々精進していきたいと思っています。

教職支援センター7～9月の動き

- 長野県総合教育センター連携講座(「キャリア教育の理論と実践」(8/6～7)、「教育課程の編成法」(8/6～7)、「障害の理解と支援」(8/27～28)、「教育の思想と歴史」(9/12～13))、
- 長野県総合教育センター「チャレンジしのめ塾」(8/18)、○山形村通学合宿(8/26～28)、
- 第1回教職事務担当者勉強会(9/20)、○松本市「子どもプレイパーク」(9/22～23)



教育系ボランティアを通して



教員になろうと思い、大学に入学してから現在に至るまで幼稚園生、小学生、中学生、高校生など様々な年代層を対象にした教育系のボランティア活動に参加してきました。今回は様々なボランティア活動を通して感じたことや考えたことを皆さんに伝えられればと思います。稚拙な文章ではありますが、最後まで読んでいただけるとありがたいです。

最近参加したボランティアに9月に行われた「生徒の主体性を育む夏合宿」があります。これは高校生たちが自ら実行委員会を運営し、さまざまな議題を決めて、当日に議論し、教員や校長会、更には長野県議会にまで議論した内容を提案するというものでした。事前に行われた実行委員会の話し合いなどにも参加しましたが、できるだけ発言はしないようにしました。当日の高校生の議論中でも、話が逸れた時や行き詰った時にだけアドバイスをを行い、時間通りに進行できるようにしただけで、内容面でのアドバイスは極力しませんでした。

今回のボランティアだけでなく、ある時から私は教育系のボランティアに参加するときは極力子どもに口出しをしないということを意識するようになりました。なぜかというと、自分で気が付いてほしいことや、口で説明しただけでは学べないことが沢山あると思ったからです。大学3年生の時に参加したボランティアで小学生がお著作体験をする活動の補助をしていたときに、再三注意したにもかかわらず、手を切ってしまった子どもがいました。職員の方に謝ると、「これで奴も学んだよ。一回痛い目に遭わないとわからないもんだよ。」と言ってくれました。過激に感じる人もいるかもしれませんが、私もその通りだと思いました。私も小中学生時代に、学校で窓ガラスや理科の実験器具を割った時に先生たちから「あぶないから。」と言われて片づけをしなかったことがあります。確かに割れたガラスで手を切りそうな感じはしますが、当時はガラスで手を切ったことがなかったので実感が湧きませんでした。大学入学後、割れたスライドガラスを素手で扱って、人差し指から大量に出血したことがあり、その時に初めて割れたガラスは危ないんだなあと実感しました。なので、先ほどの職員さんにこの言葉を掛けられた時のことは本当によく覚えています。多少の怪我や不快な思いをして我慢するのも、結果としてはその子どもが成長するうえで必要なのではないかと思うようになりました。「生徒の主体性を育む夏合宿」では高校生が相手で、なおかつ室内の活動だったので危険なことなどは少なく特に口を出すこともなかったのですが、小中学生のボランティアでは野外活動や作業が多く、そうはいかないことが多々あります。しかし、子どもたちに気付いてほしい事や感じてほしいことをすぐに口出ししてしまうのは、先入観を与え、学びの機会を奪ってしまう可能性があると思います。ボランティアを通して考え方や見方が新しくなりました。

これを最後まで読んでくれたそこのあなた、ぜひ教職の先生方を訪ねてみてください。ボランティアを紹介してもらって、新しい世界に踏み出しましょう。

(総合理工学研究科修士課程1年 滝口 大智)

編集後記

後期の授業が始まりました。私の場合、後期は、かつて1年生前期の授業を担当していた高年次生にまた授業で会えたり、進路が固まった4年生の報告を聞けたり、嬉しい再会の時期です。これから約5ヶ月、さらに深みを増した高年次生の皆さんと、一緒に考えたり議論したりする時間を大切に過ごしたいと思います。(広報担当 河野桃子)

